

松が岬・大町通り界限

前項ではエリアCを「かつての米沢の中心」と紹介しましたが、それ以前の中心エリアが、ここ上杉神社周辺および大町界限です。

上杉神社および松が岬公園は、元米沢城本丸であり、大町は、城にもっとも近い町人町として、また大店が軒をならべる問屋街として大いに賑わったところ。まさに江戸時代における米沢の政治・経済の中心は、この界限だったといえるでしょう。

そんな様相が一変したのは、いわゆると知れた明治維新の後のことでした。

米沢城はまず二の丸から解体が進み、堀は埋め立てられ、土居は崩され、徐々にその姿を失っていました。



明治時代に造られた舞鶴橋

丸跡が公園として一般に開放されたのは明治七年（一八七四）のことですが、公園と

は名ばかりの荒れはてた状態だったといえます。明治十八年（一八八五）、この様子を見かねた有志が、甘棠会という城跡整備のための団体を結成、これにより、松が岬公園はようやく公園らしい体裁を整えていったのです。

上杉神社は、公園よりも早く明治九年（一八七六）には現在のような形に整備されています。驚くべきことに、この社殿や境内地などの整備費用は、すべて地元の人々からの寄付金でまかなわれていました。甘棠会のことといい、公園にも神社にも、当時の人々の並々

ならぬ思いが込められていることがわかります。そういえば、散策途中のなにげない光景も、趣深いものに見えてくるかもしれません。

このような歴史をもつエリアなので、現在では、史跡や博物館・資料館などが点在する文化・観光の中心として賑わっています。

また、小さいながらも個性的な店が多いのもこの界限の魅力のひとつです。風情のあるお土産屋・こだわりの雑貨・かばん・パン・むしパン・甘納豆、エスニック料理店からドッグ

カフェ：などなど。ぶらりと歩くのが楽しいエリアとなっています。

県社通り

明治十四年（一八八二）に開通した新しい道路で、上杉神社から東にまっすぐのびています。その名は、起点と



県社通り（上杉神社方向）

なっている上杉神社の社格「県社」に由来するもので、かつては大きな鳥居や灯籠が配されて

まさに県社のための道といった趣でした。しかし、現在ではまったく普通の道路で、「県社通り」と呼ばれることも少なくなってきたようです。

なお、開通当初は大町通りまでしか通じておらず、大門交番の交差点はT字路になっていました。大町通りが、当時いかに重要な道とされていたのかがうかがえます。現在のように東寺町通りまで延長されたのは、市内の大半が焼失した大正の大火後のことです。

大町通り

大町は江戸時代以前からあった古い町人町のひとつで、中心的な町・大きな町であることから名付けられたといえます。

江戸時代には、城下随一の問屋街で

あり、また高札場こうさつばがあつたことから交通の中心でもありました。高札場とは、藩から町人への連絡掲示板のことです。現在、小関洋服店がある交差点の真ん中に設けられており、そこは高札場交差点

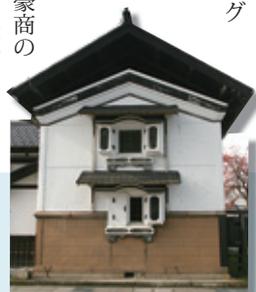
「札の辻」とよばれ、里程の基点になっていました。江戸でいえば日本橋、大いに賑わったというふうな感じがします。



札の辻のあつた場所

また、大町は御用商人・豪商の町でもありました。当時、屋敷一軒の間口は六間が基本でしたが、大町には間口が十五間・二十一間・三十間といった広大な屋敷をもつ商人が何人もいて、彼らは藩に何万両と借り上げられても破産せず、その経世の才を見込まれて公の役職につくこともあれば、豪華な遊びが過ぎて処罰されることもありました。そんな豪商たちも、明治維新以後の急激な社会の変化によつて次第に姿を消していきます。

現在、大町通りを歩いてみると、実は土蔵がとて多いことに気がつくきます。大町商人の半分は蔵持ちだったという往時の賑わいを想像しながら歩くのも、城下町の楽しみ方のひとつです。





米沢の美しい風景

松が岬公園の四季



夜桜も美しい春の夜



お堀の一角が蓮にうめつくされます



美しい桜の紅葉



雪灯籠まつりの幻想的な空間